

### 3. 加茂町旧燈明寺藏伝如意輪觀音像納入文書について

田中淳一郎（技師）

#### 1. 燈明寺（東明寺）の歴史

相楽郡加茂町大字兔並小字寺山にあった燈明寺は、奈良時代に行基によって開かれたという寺伝を持つ古刹である。<sup>(注1)</sup>しかし、開創については、平安時代に弘法大師の弟子真暁上人によるという記録もあり<sup>(注2)</sup>、検討が必要である。

現在木津町大字木津の御霊神社に伝わる「大般若経」のなかに、嘉禄元年(1225)「東明寺源長」が願主となって書写した旨の奥書を持つものがある。<sup>(注3)</sup>東（燈）明寺の名が見える最も早い資料であり、鎌倉時代には当寺が存在していたことが確認される。なお、寺号は「東明寺」と書かれる例が多く、「燈明寺」は江戸時代に一部で使用されるようになり、近代以降はもっぱら「燈明寺」となったようである。

鎌倉時代末期に燈明寺は整備されたようで、5体の観音像、燈明寺型として著名な石燈籠<sup>(注4)</sup>、あるいは十三重石塔など、現在に遺るものはいずれもこの頃に作られている。が、寺伝等の記録には全く現れず、制作の経緯を知るこ

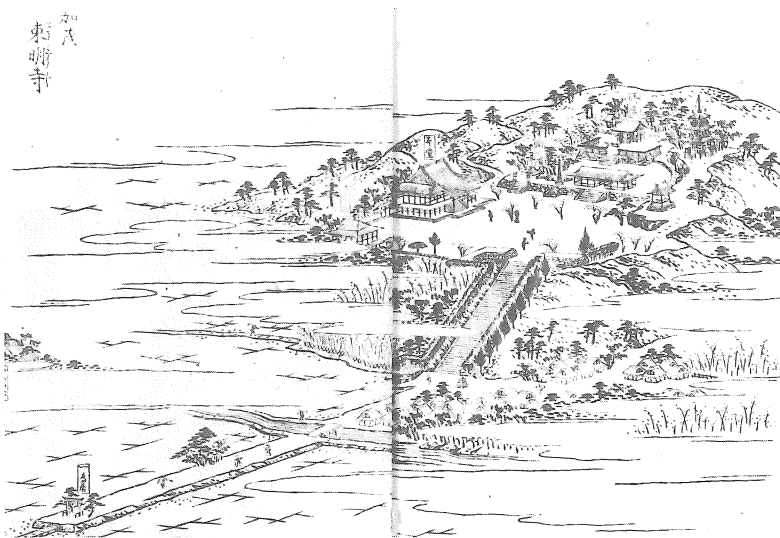
とはできない。

その後、室町時代初頭に戦火にあい荒廃し<sup>(注5)</sup>ていた燈明寺を再興したのが、天台僧賢昌房忍禅である。忍禅は、康正3年(1457)頃に本堂や三重塔を建立するとともに、燈明寺別院の興法院に住して、仏涅槃図や三千仏図などを同院に施入している。<sup>(注6)</sup>忍禅のときに、燈明寺の隆盛が築かれたのであろう。

忍禅ののち再び荒廃していたが、江戸時代になり、京都本圀寺の僧日便が兔並村の領主藤堂家の助力を得て復興した。寛文3年(1663)のことである。<sup>(注7)</sup>以後は本圀寺末の日蓮宗寺院として法を嗣いだが、近代には寺勢衰え、本堂や三重塔も移築され、今は昔日の面影はない。<sup>(注8)</sup>

#### 2. 旧燈明寺の観音像

旧燈明寺には、5体の観音立像が伝わっている。その5体は、本尊とされる千手観音と、十一面、伝如意輪、聖、馬頭の各観音である。漆箔仕上げの千手観音を除く4体は、寄木造り、素地仕上げで、制作技法も似ている。ほぼ同じ頃に制作されたと考えられる。ただ、



江戸時代中期の燈明寺の  
景観

（『拾遺都名所図会』  
（1787刊）より、加茂町  
岩口勝彦氏蔵）

表1 旧燈明寺の観音像

名 称	像高(cm)	技 法
木造千手観音立像	172	一木造、漆箔仕上
木造十一面観音立像	182	寄木造、素地仕上
木造伝如意輪観音立像	180	寄木造、素地仕上
木造聖観音立像	109	寄木造、素地仕上
木造馬頭観音立像	111	寄木造、素地仕上

像高が、十一面と伝如意輪は等身で、他の2体は3尺程度とかなり差があるところから、一具のものとして作られたのではないだろう(表1)。

本観音像群の制作年代について述べておこう。これまでは、千手観音は鎌倉時代後期のもので、他の4体は室町時代のもと言われていた。<sup>(注9)</sup>ところが、昭和59年から61年にかけて5体すべての解体修理が行われ、その過程で、伝如意輪観音立像の頭部内から納入品が発見された。発見されたのは、木造合体天部立像2体と、「観音像造立奉加結縁交名」約70枚である。「結縁交名」には徳治3年(1308)正月11日の年紀があった。伝如意輪観音像は、徳治3年ごろに制作されたことが事実となった。したがって、本像と制作手法を同じくする十一面・馬頭・聖の3体も、ほぼ同じ頃に作られたと考えられる。この結果、旧燈明寺の観音像は、5体とも鎌倉後期に制作されたものといえることができる。

ところで、伝如意輪観音立像であるが、寺伝では如意輪観音と言うが、その像容を見ると、一面三目八臂であり、如意輪ではなく不空罽索観音である可能性が高い。兎並村の庄屋を勤めた兎本家に所蔵される、安永8年(1779)の「燈明寺什物帳」では、本像を不空罽索としており、江戸時代から本像の尊名については諸説あったようである。

本尊を不空罽索観音像とすると、次の問題が生まれる。これらの観音は、いわゆる六観音に含まれるものであり、六観音とは、天台宗系では、聖・十一面・千手・如意輪・不空罽索・馬頭の6体で、真言宗系では不空罽索



木造伝如意輪観音立像

の替わりに准胝を入れた6体の観音を言う。したがって、燈明寺の観音像は天台系の六観音ということになるのだが、像が制作された時期に燈明寺が天台宗であったという確証はない。室町中期の忍禅再興寺に天台宗に改めたと伝えるから、むしろ天台宗ではなかったと考えるべきであろう。なぜ、天台宗系の六観音と思われる観音像群が燈明寺に残るのだろうか。

考えられるのは次のような場合である。1つは、本来は別の像であったものを、天台宗に改宗したときに像に手を加えて尊名を変更するケースで、1つは、天台宗に改宗したときに他寺から像を移したケースである。もし、本像群が当初より六観音を意図して制作されたものならば、法量・技法等が揃うはずであるから、後者の考え方、すなわち他寺から移して天台宗の六観音としたという考え方も、否定するわけにはいかない。今はどちらかに決するだけの準備もないので、今後の検討課題として残しておきたい。

### 3. 「観音像造立奉加結縁交名」の分析

伝如意輪観音立像頭部内から発見された納入品は、木造合体天部立像2体、鉄釘2本、「結縁交名」約70枚と、それらを入れていたと思われる綿の袋である。しかし、いずれも損傷甚しく、袋は原形をとどめず合体天部立像も尊名を決することができないほどに傷んでいる。なお、合体天部立像は、ともに像高12cm程の小像で、近くでは浄瑠璃寺の木造馬頭観音立像(1241年制作)の胎内仏のなかに木造合体毘沙門天立像があることが知られているが、類例の少ない珍しいものである。

以下、「観音像造立奉加結縁交名」について詳しくみていくことにしたい。

「結縁交名」は、筒状に巻いた状態で見つ



伝如意輪観音立像納入品発見状況  
上 錦袋、下左 結縁交名、中 鉄釘、  
右 合体天部立像

かった。復原すると68点になり、現在は外側にあったものから順にならべて卷子装としている。表2は、その順に番号を付し、一覧としたものである(以下表の番号で、1号文書等と記す)。

内容は、結縁者名と奉加額を記すものが主であるが、奉加額を記さないものも多い。結縁者総数は、読みとれるもので624名、奉加額は1,500文以上になる。上下を欠失するものが多いので、本来は結縁者数、奉加額ともっと多かったものと推測される。

形状は、タテ30cm以内、ヨコは3~10cmほどの短冊形をしたものがほとんどである。一部には折紙のものや、68号文書のように2紙を継いだものもある。乙訓郡大山崎町大字大山崎の大念寺にある木造阿弥陀如来立像(1243年造立)像内納入の「結縁者名簿」に類似している<sup>(註10)</sup>。

年紀を有するものは、22号、25号、31号、34号、53号、55号、64号、68号の8点で、すべて徳治3年(1308)正月11日である。この日に本像への結縁が行われたのであろうし、また、本像が作られたのもこの頃ということになる。

つづいて、「結縁交名」の内容にたちいっていくつか検討を加えておきたい。

まず第1に、本交名に多くみられる院号についてみておこう。西轉経院、四恩院、恵心院、日明院などの名前が奉加の主体として表れている。これらは南都興福寺に属する院と思われる<sup>(註11)</sup>。裏づけるように4号文書によると、「別会五師」が51文を奉加しているが、別会五師とは、興福寺の寺務を評定し神事法会を主宰する五師のうち年番に当たる者を言う<sup>(註12)</sup>。したがって、この観音像造立に興福寺が関与していたのは疑いのないところである。燈明寺のある兔並は、当時賀茂庄内であったが、賀茂庄は、東大寺、興福寺等を領主としていた。興福寺が寺領庄園での観音像造立に、領主として援助を与えたものと推測される。

表2 「観音像造立奉加結縁交名」一覧

番号	法量	結縁人数(人)	総奉加額(文)	備考
1	24.5×46.0			(虫損大)
2	16.2×2.2	3		
3	19.0×3.4	5		
4	19.6×6.5	1	51	別会五師沙汰
5	21.2×5.0	1	11	
6	22.0×4.5	17	5□	
7	13.0×2.7	3		
8	11.0×3.1	4+	11	
9	22.5×4.5	1	20	弥□□御房
10	13.5×1.5	4		
11			134	(損大)
12	30.2×42.5			(損大, 断片とも)
13	10.5×7.0	3	2+	
14	24.8×3.9	1	77	のたより
15	22.0×13.5	4	□5	シゝカウトノフム
16	28.9×6.0	18		
17	24.0×2.8	1		□山房ノサタ
18	19.5×5.7	1	3	順泉房
19	20.8×3.4	10		
20	30.0×5.2	7	50	西轉経院
21	26.0×4.8	1	36	松専房
22	14.0×6.3	15+		正月十一日於四恩院
23	— ×10.0			(損大) 一日造立千手観音仏
24	23.2×4.2	6	317	四恩院之内奉加分
25	26.0×11.6	17		一日仏造立奉加交名
26	13.5×4.0	1	2□	
27	21.3×5.2	9+	25+	
28	26.7×4.9	12		
29	22.6×2.5	5		
30	23.0×19.8			
31	21.0×22.2	72		仏奉加錢交名
32	23.4×9.7			
33	24.0×13.5	14	19	(かな書)
34	23.5×20.0	12	12	各一文
35	10.0×4.3	5		

番号	法量	結縁人数(人)	総奉加額(文)	備考
36	13.5×5.2	18		一日造営不□絹索観音奉加錢
37	23.0×4.8	7		
38	14.0×4.5	1		日明院
39	17.8×3.9	1	33	願あみたふさた
40				(断片)
41	20.2×1.9	1	20	
42	17.5×6.4	1	107	
43	26.8×6.7	1	50	恵心院沙汰
44	22.0×4.4	1	1□	日信坊大沙汰
45				(断片「松林」とあり)
46	21.6×19.3	48		一日観音御身中にコムル交名
47	27.5×6.7	3	10	菩提院方
48	25.0×6.4	6	14	
49	26.8×5.8	7	30	東常沙汰
50	24.2×4.5		33	吉祥御奉加錢
51	26.0×8.6	11	13	□舜房分
52	28.5×8.0	11	33	舜願房
53	28.5×10.0	1	37	光林院
54	15.5×2.4	1	6	□□院
55	28.5×9.5	1	50	伯耆公家内合分
56	30.0×43.3	19	33	(折紙)
57	7.5×2.1		10	
58	15.0×3.5		15	
59				(断片)
60	18.5×3.3			覚勤房沙汰
61	27.0×13.3	17	57	
62	26.0×4.7			
63	28.0×5.7	1		舜湊房
64	26.0×6.3	1	33	良□房沙汰
65	27.7×3.7	1	11	定円坊沙汰
66	27.3×13.2	34	34	
67	27.8×38.0	2	16	永信房
68	27.7×82.3	24	14	(2紙を継ぐ)

- 結縁人数、総奉加額の「+」は、現在欠失しているが本来は書かれていたと推測できるものについて、示した。
- 備考には、奉加の主体、交名の題、残存状況等をあげた。

そのなかでも、四恩院は奉加額317文以上と、1院で全体の20%もの奉加を行っている。徳治3年正月11日に、四恩院で「御祈禱三十頌」が実施されたことが『春日神社文書』から知られるが、これが本像造立と関係するの<sup>(注13)</sup>かは未詳である。

次に、1文や2文を奉加し結縁している人々についてみていこう。600人以上の交名者があるのだが、その居所が記されている者はいない。唯一、61号文書に「コマノ三□」という例があって、狛野庄（現山城町大字上狛）に住む人物かと考えられる例があるのみである。さまざまな思いをこめて結縁したであろう人びとの居所が知れないのはたいへん残念である。

交名の名のりには、次のような類別がある。①「殿」を称するもの、②「阿弥」号を持つもの、③「尼」を称するもの、④「女」と称されるもの、⑤俗名の男性、⑥「丸」と称される幼名の男性、⑦入道名を称するもの、そして⑧「房」の号を持つ僧である。<sup>(注14)</sup>当時の村落のすべての階層が結縁していることがわかる。しかし、もっとも一般的であるべき俗名の男性が少なく、僧尼名が多いことは、この交名の性格の一端を物語っているのかもしれない。

55号文書は、「伯耆公家内合分」とあり、伯耆公といった受領名を名のるような有力者が、一家として奉加結縁していることがうかがわれ、当時の信仰形態の一側面を示すものとして興味深い。

3番めに、それぞれの交名につけられた表題についてである。表2の備考に掲げたように、いくつかの交名には注目すべき題が付されている。

その1つは、23号、25号文書他のように、「一日造立」、「一日仏造立」という記載があることである。『興福寺略年代記』の徳治元年（1306）5月日条に、「為祈雨、等身十一面観音像、一日造立之」とあり、雨乞いのた

めに、1日で等身の観音像を造立したことがあったようである。とすると、燈明寺の観音像も、なんらかの目的を持って、徳治3年正月11日に、1日で造立されたものということになる。その目的が何であったのかは知り得ないが、観音像を1日で造立し、31号文書に見える「郷中所願」や「法界衆生成仏」の祈願を籠めたのであろう。46号文書には、「一日観音御身中ニコムル交名」とあり、本交名は、当初から像内に納めることを目的として作られたことも明らかである。

2つには、23号文書に「一日造立千手観音仏」とあることである。本像は、もちろん千手観音ではないし、燈明寺旧本尊の千手観音像も、本像と同時に造られたものとは考え難い。元来は、本像と同工の千手観音像も制作されたのであろう。尊名の異なる像に、この交名を納入した理由はよくわからないが。また、36号文書も同じような形式の交名であるが、「一日造宮不□□□観音奉加銭」と題されている。欠損部分は、残された字画からみて、「□縹索」と読むことができそうである。本像は、やはり不空縹索観音なのだろうか。

#### 4. おわりに

このように、旧燈明寺の伝如意輪観音像の頭部内から発見された「観音像造立奉加結縁交名」には、わからない点も数多い。

しかし、旧燈明寺に伝わった5体一群の観音像の年代を決める資料となった点で、価値は大きいものがある。さらに、この造立に興福寺が関係していたことから、賀茂庄の庄園領主である興福寺が、庄内の寺院における観音像造立に助力したことがわかった。

このころの賀茂庄は、庄園領主の支配に抵抗する、いわゆる「悪党」の活躍する庄園として知られている。一方では、庄園領主が観音造立の機会を利用し、庄園の人びとを結縁させようとし、他方では悪党が出現し領主に対立して百姓を味方につけようとする。この

ような騒然とした状況のなかで、旧燈明寺の観音像造立は行われたのであった。鎌倉時代末期の南山城庄園の様相の一端をうかがわせてくれる、興味深い資料である。

(注1)「東明寺過去帳」裏書(1841年)  
東京都 正法護持財団蔵。なお、旧燈明寺の什物は、観音像等すべて同財団の所有であり、本稿の資料は特に断わらない限り、同財団蔵のもので、現在は当館に寄託されている。

(注2)「東明寺縁起」(1696年)  
「興福寺官務牒疏」(『大日本仏教全書 寺誌叢書3』)所収、1915年)

(注3)木津町 中岡義隆氏蔵

(注4)鎌倉末期の石燈籠は江戸中期に京都三井家に売却され、現在は東京三井邸に存す。売却されたとき作られた模作が、現在旧燈明寺境内にある。

(注5)「仏涅槃図裏書」加茂町 常念寺蔵

(注6)同上、「三千仏図裏書」 常念寺蔵  
興法院は近世に廃寺となり、什物は常念寺に寄せられ、現在に伝えられている。

(注7)「東明寺縁起」(1696年)

(注8)三重塔は1914年に、本堂は1982年に横浜市三溪園へ移された。

なお、燈明寺の歴史については、当館編『燈明寺の文化財』(1986年4月刊行予定)を参照されたい。

(注9)京都府寺院重宝調査など

(注10)大山崎町『大山崎町史 史料編』(1981年)

(注11)「興福寺院家伝」(『大日本仏教全書 興福寺叢書2』1932年)

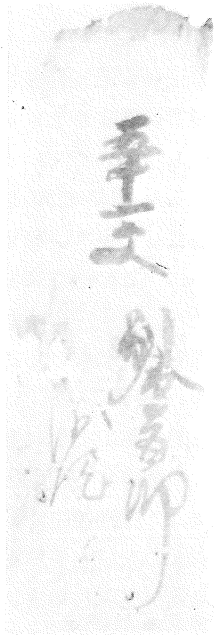
(注12)永島福太郎『奈良文化の伝流』(1951年)

(注13)『鎌倉遺文』30巻 23146号

(注14)ちなみに、①「殿」は17名、②「阿弥」は18名、③「尼」は11名、④「女」は62名、⑤俗名は21名、⑥「丸」は79名、⑦入道名は73名、⑧僧は80名である。これは確実に判明するものだけを数えたので、総数とは隔たりがある。

(注15)『続群書類従』29輯下所収

(注16)『鎌倉遺文』30巻 23252~23254号



。四号文書  
五十一文

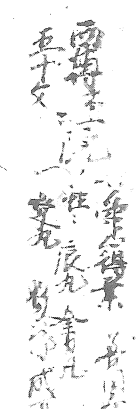
別会五師  
沙汰



。二一〇号文書  
奉加 三十六文 松専房

西轉經院  
五十文  
夜叉丸  
夜叉次郎成万

□舜房得業 善同房  
□性房 辰丸 金力丸



。二二号文書

- 一日造立千手観音仏鉢入交□
- 明春房 □□女 良空
- 福寿女 観能丸 ア□女
- 俊ンアミ 三良 金剛
- 琳智 龍鶴女 春□
- 過去 廣智 □□女□□

一日造立千手観音仏鉢入交  
 明春房 観能丸 ア女  
 俊ンアミ 三良 金剛  
 琳智 龍鶴女 春  
 過去 廣智

。二二号文書

- 如過去□ 尼覺性 真珠女 現在□□了悟 若悟
- 岩丸 持倫 乙王丸 同妻 同春千世丸 行乘□
- 春王女
- 年正月十一日 於四恩院送□寺訴成弁也

如過去 尼覺性 真珠女 現在 了悟 若悟  
 岩丸 持倫 乙王丸 同妻 同春千世丸 行乘  
 春王女  
 年正月十一日 於四恩院送 寺訴成弁也

。三三号文書 (読みは後掲)

三十三号文書 (読みは後掲)

。二四号文書

奉造 參百十七文(カ)

四恩院之内

奉加分

。二五号文書

德治三年正月十一日ノ一日仏サウリウノ奉加

(造立)

ノケウミヤウノ事

- 法 觀也ウ □□女 春女 マコ女 ワカ女 □□□
- 如道 寶珠丸 長寿丸 竹石丸 寿阿ミタ仏
- 良阿ミタ仏 相智 入佛 善阿ミタ仏 クロ丸

德治三年正月十一日 佛サウリウノ奉加  
 ノケウミヤウノ事  
 法 觀也ウ □□女 春女 マコ女 ワカ女 □□□  
 如道 寶珠丸 長寿丸 竹石丸 寿阿ミタ仏  
 良阿ミタ仏 相智 入佛 善阿ミタ仏 クロ丸

。三一号文書

仏奉加錢交名

- 房 舜誠房 舜善房 重願房 丹波房
- 尊勝房 同春□ 文殊 観音 松 初 春
- 妙真房 春庸丸 松代丸 鶴王丸 賢印
- 丸 鶴松丸 菊力 □力 春□ 全徳
- 妙信房 藤王丸 辰丸 御□ 袈袋丸
- 春鸞殿 千寿殿 □徳殿 春千代殿
- 丸 弥夜叉丸 重等 観勝 妙真 □□
- 松丸 法師 金剛丸 菊 五藤□ 観音 阿古
- 大夫 今□ 今熊 阿念 以上七十二人(カ)
- 德治三年 申正月十一日 為寺訴成弁面々郷中所願
- 圓満法界衆生成仏□

佛奉加錢交名  
 房 舜誠房 舜善房 重願房 丹波房  
 尊勝房 同春 文殊 観音 松 初 春  
 妙真房 春庸丸 松代丸 鶴王丸 賢印  
 鶴松丸 菊力 力 春 全徳  
 妙信房 藤王丸 辰丸 御 袈袋丸  
 春鸞殿 千寿殿 徳殿 春千代殿  
 弥夜叉丸 重等 観勝 妙真  
 松丸 法師 金剛丸 菊 五藤 観音 阿古  
 大夫 今 今熊 阿念 以上七十二人  
 德治三年 申正月十一日 為寺訴成弁面々郷中所願  
 圓満法界衆生成仏

。三六号文書

一日造宮不<sup>〇</sup>絹索観音奉加銭事  
冥<sup>〇</sup>寛儀<sup>〇</sup>信阿<sup>〇</sup>阿<sup>〇</sup>妙阿<sup>〇</sup>妙禪  
妙歌<sup>〇</sup>我行<sup>〇</sup>菊女<sup>〇</sup>石松丸<sup>〇</sup>丸<sup>〇</sup>春松丸<sup>〇</sup>松丸<sup>〇</sup>観音  
春王丸<sup>〇</sup>石女<sup>〇</sup>定寿<sup>〇</sup>衆生<sup>〇</sup>

一日造宮不<sup>〇</sup>絹索観音奉加銭事  
冥<sup>〇</sup>寛儀<sup>〇</sup>信阿<sup>〇</sup>阿<sup>〇</sup>妙阿<sup>〇</sup>妙禪  
妙歌<sup>〇</sup>我行<sup>〇</sup>菊女<sup>〇</sup>石松丸<sup>〇</sup>丸<sup>〇</sup>春松丸<sup>〇</sup>松丸<sup>〇</sup>観音  
春王丸<sup>〇</sup>石女<sup>〇</sup>定寿<sup>〇</sup>衆生<sup>〇</sup>

。三四号文書

各一文  
有<sup>〇</sup>行有<sup>〇</sup>遍<sup>〇</sup>春<sup>〇</sup>  
満女<sup>〇</sup>地藏女<sup>〇</sup>乙女<sup>〇</sup>春女<sup>〇</sup>慈氏女<sup>〇</sup>  
春藤丸<sup>〇</sup>  
已上十二文  
徳治三年正月十一日二条<sup>〇</sup>

各一文  
有<sup>〇</sup>行有<sup>〇</sup>遍<sup>〇</sup>春<sup>〇</sup>  
満女<sup>〇</sup>地藏女<sup>〇</sup>乙女<sup>〇</sup>春女<sup>〇</sup>慈氏女<sup>〇</sup>  
春藤丸<sup>〇</sup>  
已上十二文  
徳治三年正月十一日二条

。五二号文書

〇造立観音奉加銭三十三文  
学曹  
舜願房

生阿弥佛  
地阿弥陀仏  
実慶  
印  
カメ石女  
元行

四六号文書  
〇三年一日観音御身中ニコムルケウ名事  
生阿弥陀佛  
地阿弥陀仏  
実慶  
印  
カメ石女  
元行  
観音尼  
フクス尼  
名石女  
ヲト、女  
尊珠  
恒実  
賢覚房  
金剛丸  
石女  
尼女  
コウタウ殿  
長命女  
政  
法師  
メツル女  
四郎大  
浄智法師  
識舞房  
春願房  
〇時  
十郎  
国ツク  
次郎  
良義房  
慶忍房  
学願房  
ツル  
平三郎  
陀佛  
小法師丸  
フク石女  
浄智法師  
セイシ  
女  
治部殿  
乃去法界平等利ヤクノタメ奉加  
如件

生阿弥佛  
地阿弥陀仏  
実慶  
印  
カメ石女  
元行  
観音尼  
フクス尼  
名石女  
ヲト、女  
尊珠  
恒実  
賢覚房  
金剛丸  
石女  
尼女  
コウタウ殿  
長命女  
政  
法師  
メツル女  
四郎大  
浄智法師  
識舞房  
春願房  
〇時  
十郎  
国ツク  
次郎  
良義房  
慶忍房  
学願房  
ツル  
平三郎  
陀佛  
小法師丸  
フク石女  
浄智法師  
セイシ  
女  
治部殿  
乃去法界平等利ヤクノタメ奉加  
如件

。三三号文書

二もん者ゆふ 一もんい 五もん はや 二もんは  
二もん 〇つ女 二もん ひめ女 一もん はうし丸  
一もん まゝ 一もん 尼女 一もん けうあミ  
已上十五もん 一もん しあミたふ 一もん さゝ  
一もん こう房 一もん むろう房  
已上四もん

六一号文書  
覚善房得業 延願房 〇願房 順覚房  
〇覚房大 從仏房 コマノ三郎 春照丸  
〇鶴丸 定光 千寿丸 藤丸  
得仏御師 石女 薬師女  
〇十七人 錢五十七文

徳治三年正月十一日奉送加件  
伯耆 家内合分、以上五十文者  
徳治三年正月十日奉送加件

。五五号文書

正月十一日造立仏奉加銭事  
伯耆 家内合分、以上五十文者  
徳治三年正月十日奉送加件